

佐賀出身の吉田絃二郎の思想研究

伊藤重行

はじめに

現在、九州や日本全国で吉田絃二郎の名前を聞くことはほとんどない。もう既に忘れられた日本の英文学者である。しかし彼は、日本のベストセラー作家であったことは自明である。彼は、明治19年佐賀県神埼（現、神崎市）に生まれる。4歳の時、両親に連れられて、佐世保に移住。17歳で佐賀工業高校を卒業、その後20歳で早稲田大学英文学科に入学し、25歳で卒業した。29歳（大正4年）の時、早稲田大学講師となり、英文学と英語を担当した¹⁾。教え子の井伏鱒二によれば、ワーズワース、ブレイク、モーリス、バーンズなどの講義を通じて英美的美と日本的美について比較した講義に力点を置き、非常に魅力的な講義であったと述べている²⁾。吉田絃二郎は、早稲田大学英文学の坪内逍遙、島村抱月に次ぐ英文学者と言われていた。彼の生きた時代は、ホワイトヘッドの時代と大差ないので両者の美の比較を通じて、新しい文明の光を抽出しようと試みる。

1 早稲田大学時代の吉田絃二郎と井伏鱒二

1, 吉田絃二郎と井伏鱒二

吉田絃二郎は、井伏鱒二が早稲田大学の予科の学生の時に、もう既に教授で講義をしていた井伏19歳のときであった³⁾。井伏によれば、吉田絃二郎は、ジャーナリズムが嫌いであったとのこと。吉田絃二郎はその頃、ノルソンの短編、ブレイクの詩、バーンスの詩、

キーツの詩を講義していた⁴⁾。先生は講義の途中、しばしば恋愛や芭蕉や歎異抄やマアカス・オーレリウスや永遠やキリスト等に関する感想を述べられていました。指先でもって眉間の皮膚を按摩しながら、先生は情熱的な口調で、そして早口に饒舌りました。私は今も尚ほ、その口調や言葉を鮮やかに記憶してゐます⁵⁾。また井伏は吉田絃二郎の大学での講話が、次々に文章になって雑誌に発表されていたこと、そして吉田絃二郎の作品として次々に出版されて行ったことも述べられている。彼の講義は、「甚だしく私たち学生を感動させました。私たちは恍惚として、その講話を聞きながら心の中にガリラヤの青くはれ渡った空を思い描き、パロサイの学者を憎むこと切なるものでありました。左右して放課の鐘が鳴ると、大急ぎで古本屋へかけつけ、古本屋の主人に“ルナンのキリスト伝はないかね？”と言ったのです。先生は他の教授先生たちの誰よりも多量に、教室のなかにポエジイを導き入れ、語学や熟語からポエジイを解放されたかと思ひます⁶⁾と述べている。

2, 吉田絃二郎と岡田式静坐

吉田絃二郎は、早稲田大学文学部で坪内逍遙、島村抱月の下で英文学を研究するのみならず、人生の生き方についても学んだ。その生き方の基本は、正しい姿勢としての恩師の生き方であった。坪内逍遙は、特に岡田式静坐法を精神の中心に置いていた。晩年の吉田絃二郎の書齋で執筆している姿勢は、岡田式静坐法を追求していることが分かる⁷⁾。明治

維新以降に、特に人間の生き方が問題になった。そこに岡田虎次郎が現れ、岡田式静坐法を健康な生き方のために、指導し始めた。彼、岡田虎次郎は、愛知県渥美半島の今もある田原町出身で、明治5年生まれである。岡田虎次郎は、最初稲の害虫の「ずいむし」の研究をし、立派な業績を上げたが、30歳にして米国に留学し、帰国後静坐の健康法の開発と普及につとめた。彼は、精神の統一と健康の結びつきに確信を持っていた。そのため東京の一橋大学や早稲田大学の様な大学の中で多くの弟子を持つことができた。吉田絃二郎も坪内逍遙、島村抱月などの後を継いで、この岡田式静坐法を実行していたし、また吉田絃二郎と親しかった釧路湿原の聖人・長谷川光二もまた岡田式静坐法の実践者であった。

II A・N・ホワイトヘッドの世界

1, A・N・ホワイトヘッドの美を理解する前提

吉田絃二郎は、英文学の研究者であったためワーズワースの研究もしていた。A. N. ホワイトヘッドも同じくワーズワースの詩に親しみ、研究もしていた。このことからここでこのテーマは、ホワイトヘッドの「美」について論述してみよう。ホワイトヘッドは、どんなことを「美しい」とか「素晴らしい」と考えたり、感じたりするのであろうか。そのような思考や感覚について、彼は文明が進歩してきたわずか3000年にしか過ぎないとしている。彼によれば、人間の魂としての「プシケー」について、他言すれば「心」について人間が問い始めたのはこの文明化が始まってからと考えている⁸⁾。そして文明化し始めた人間社会の構成員は、互いに相手を「情緒、情熱、快と不快、知覚、希望、恐怖、目的などを享受している個人として認識し、・・・また真偽、美醜、善悪についての判断を含む知的理解の能力もある」⁹⁾と考え、生きており、お互いが同じような認識をし、社会経験

や社会という組織を形成している。この論述は、仮にこの世界に一人の人間だけでは、美の世界が成立しないと暗に示していると言える。

上記のホワイトヘッドの美、美しさ、素晴らしさに対する解説でそれらの意味が十分に理解できないのであるが、『観念の冒険』の第四部「文明」を読むと一層理解が深化する。ホワイトヘッドが文明化した社会、あるいは文明化した国家、文明化した国民、文明化した個人とは、真理、美、真理と美、冒険、平安（原語はpeace＝平和）について何らかの認識を持つこと、すなわち哲学を持つこととしているのである。しかしながらこれら五つの概念を議論する前に、ホワイトヘッド哲学の根本である一緒になってある意味の共存性、さらには創造性、合生、手を結びあうような抱握性、フィーリング（感受あるいは感じ）、主体的形式、与件、現実的実質（原語はactual entities＝現実存在）、生成、過程を理解して置かなければならない。これらの概念は、哲学的には存在論的範疇と言えるが、しかしそんなに難しい言葉を使わないでも、「ある事物が死と生の間を揺れ動きながら進化して行く生命体」と言う考えを想像してもらえれば、ここでは良いであろう¹⁰⁾。

2, A・N・ホワイトヘッドの美と美しさの説明

ホワイトヘッドの美と美しさの説明をみて見よう。ホワイトヘッドは、「美＝beautyは経験の契機におけるいくつかの要因の相互互惠的適応＝mutual adaptationである。こうして原初の意味で美は、諸契機中で例証される性質である。あるいは逆の言い方をすれば、それは、これらの契機が関与する事ができる性質である。美と、美のタイプにはさまざまな段階がある。」¹¹⁾と述べ、「適応＝adaptationは、目的＝endを含意している。こうして美は、適応の目標＝aimが分析さ

れる時に定義されるだけだ。この目標は二重になっている。それは、さし当たってまず、種々の抱握間の相互互恵的な抑止の欠如であり、したがって、種々の抱握の客体的内容から自然的かつ適切に一あるいは一言でいえば、順応的に一生起する主体的形式のさまざまな強度が、相互互恵的に抑止し合わないということである。」¹²⁾と述べる。これらが保障されていると、小さい形の美と大きな形の美のコントラストを作り、それらが相互に関係し合って様々な抱握が起り、そして様々な強度が生じて、その強度に応じて諸部分が全体の重厚な感じ＝feelingsに寄与し、また全体は諸部分の感じの強度に寄与する。まとめて見ると、「美の完全性は、調和の完全性として定義され、調和の完全性は、細部における、そして最終的総合における主体的形式の完全性と定義できる。主体的形式の完全性は力強さと定義でき、それは細部の多様性を伴う重厚さと、質的多様性とは無関係の大きさとしての適度な強度と言い換える事ができる」¹³⁾と述べている。そしてまた美という用語には二つの意味があり、原初的意味として、それは、「宇宙における完全にリアルな事物である現実的契機において実現される美である。しかし契機の分析において、その客体的内容の若干の部分が美しいと呼ばれるのは、それらが完結する契機の主体的形式を完成するため順応的に寄与するがゆえであるかもしれない。」¹⁴⁾し、次にもう一つの意味で「ある契機に実現される美は、その契機がそこから成立する客体的内容と、その契機の自発性との依存している。」¹⁵⁾と述べている。ここでの前者の原初的意味での美は、宇宙が完成し調和していく過程で見せる、美しさの美であり、後者の意味での美は、ある芸術家や美の関係者が、作品を通じて自発的に作り上げていく美しさの美、(ある場合には芸術家や詩人の魂といっても良い)であることになる。あるいはまた前者を自然の美と、後者を人工の美と言い換えても大きな間違いでは

ない。前者と後者の違いは、完全性の観点からどちらが完全であるかの差である、と解釈できる。この完全性はまた真理と置き換えてもよく、言い換えれば真理は宇宙における完全性の追求の過程であり、そうであればそれぞれの契機も美しい美を現実化し、全体としての宇宙は美を表現していることになる。この意味で美と真理は切り離せないのである¹⁶⁾。

III 吉田絃二郎の世界

1. 吉田絃二郎の美を理解する前提

ホワイトヘッドは1868年に生まれ、吉田絃二郎は1887年に生まれたが、ほぼ同時代の世代に入る。ホワイトヘッドもワーズワースの美的表現について高い評価を与えているが、吉田絃二郎も同じ様にワーズワースについて述べている。ホワイトヘッドは教会という環境で育ち、数学者から哲学者を実践し、最後に形而上学者に向かっていったが、吉田絃二郎は没落した武士の家系であり、また倒産した酒蔵の息子として生まれ、逆境の世界から志をたて、一人故郷を後にして人生を自分の手で切り開いていった人物である。明らかにホワイトヘッドのいう感受の世界に敏感に適応した世界を持っていた。人生を自分で作り上げ、実感から共感への情緒の世界の美学の構築、さらに感情や情緒に敏感に適応するのは、命だからであって、命は考える前に感じるものだとする感想の世界を独創的に創造した文学者であり、作家であった。ホワイトヘッドの抱握の感受、すなわちフィーリングを前面に出し、理性の世界ではなく、感性の世界からの認識と美学はやはり、概念ではなく感性、すなわち感じること(ホワイトヘッドの感受)を前面に出した点で、吉田絃二郎とホワイトヘッドの美学は相互に適応し合う美しさをもっていると言えよう。ホワイトヘッドは、先述したように「美は経験の契機におけるいくつかの要因の相互互恵的適応

である」と定義しているのであるから、吉田絃二郎とホワイトヘッドは美に関して相互互恵的適応をしていると言える。

2、吉田絃二郎の美と美しさの説明

吉田絃二郎は、左翼や右翼などの権力の主導権争いに距離を置き、マルクス主義文学や軍国主義文学の主張や価値観にも組みすることなく、自らの価値観や自らが創造した感想主義の文学を構築した人物である。彼は次のように述べている。すなわち「…私たちの戦いは資本家対労働者の戦いというよりは、不正直者対正直者、怠惰者対勤勉家の戦いでなければならぬと思います」¹⁷⁾と論じている。これは社会における階級対立を克服する戦いの美ではなく、人間の内面にある美の構成にかかっていると指摘しているのである。

ホワイトヘッドは美の完全性は、調和の完全性として定義されると先述したが、吉田絃二郎もまた英国のA.シモンズ (A. Symons) などの研究から英国の新しい美の創造を耽美主義と結論し、問題は「…近代の耽美派の人々の美である。刹那主義者の美である」と論じている¹⁸⁾。ここで耽美主義とは美しさに埋没している様相を表しているが、英語のAestheticismが日本語の耽美主義と翻訳されているのであるが、この翻訳は単に美学あるいは美中心主義で良いと判断すると同時に、考慮しなければならないのは、刹那主義の刹那である。この刹那は、英語のEcstasyの翻訳である。日本語の刹那は、瞬間の感性を表しているのであって、英語のEcstasyは心の有頂天の状態、あるいは恍惚感を表現しているのであり、刹那ではないと考えられる。刹那は無常観や虚無感を表現しているのではなく、美中心主義の美に恍惚感を味わう刹那ではなく、満足感であると定義できる。この意味での耽美主義は正確な定義であるとしても、刹那の上に立脚した耽美主義の美では悲壮感の漂う美学である。

そもそも吉田絃二郎の『吉田絃二郎全集』は昭和6年から9年の間に新潮社から全18巻が出版されている。その中にも入っているが彼の『小鳥の来る日』大正10年に初出版で、その後終戦時まで約200版に至るベストセラー作品であった。戦後にもまた文庫版化されて出版されている。吉田絃二郎は、「人間の心の底には不滅の光があり、美しさがあるということは真理である。しかしそれと同時に人間の心の底には滅することのできない暗があり、醜さがあるということも真理である。…人間の世界には多すぎる程の不合理があり、悪があり、陰謀があり、打算がある。それは他の動物や植物の世界では見られない醜さである。けれども同時に人間の世界では愛がある。…そこには他の動物や植物の世界では見られない美しさがある。…悪い人間ならば接しない方が宜い。孤独である方が宜い。」¹⁹⁾と述べている。ここで動物や植物の美しさは、ホワイトヘッドの言う「単純な物理的感受」(simple physical feelings)であり、他者を感じ合う感受である。これは物理的世界や動植物や、人間の細胞等にもある感性である。彼は人間の世界には愛があり、人のために自分の肉体を殺すほどの献身的行為があるし、底には動植物に見られない美しさがあるとも述べている。この人間の献身的行為としての愛は、美しさの刹那であり、絶頂感であり、恍惚感である。それはホワイトヘッドの適合的感受 (conformal feelings)、概念的感受 (conceptual feelings)、単純比較感受 (simple comparative feelings)、そして知的感受 (intellectual feelings) の全合生過程を内包しているもので、適合的感受から知的感受までの全過程の流れと、逆の知的感受が単純比較感受、概念的感受、そして適合的感受にフィードバックして行く流れの中から、吉田絃二郎が究極の美しさとする「あたたかい心と涙」に到着するのである。彼に語らせよう。「この世界に神がなかったら自分は生きては居れぬといった大思想家も

あった。私はそう思わない。神を失っても、宗教を失っても、芸術を失っても、私は生きていたい。人間のあたたかい心と涙がある間は。」²⁰⁾と述べている。

3、左翼というマルクス主義文学

このイデオロギーを全面に押し出した文学作品は、やはり受け入れる人々の価値観と共に変遷していく。マルクス主義の文学はあるところではプロレタリアートの文学とも言われてきたが、今日ではほとんどの人々によって受け入れられる価値観になっていない。この価値観は、ロシア革命の1917年以降に特に強く意識され、日本からもいく人かの文学者や女優がソ連に亡命したのであるから当時はインフルエンザのビールスに感染したようなものであった。マルクス主義文学の系譜に入る中野重治は、1929年段階でもはっきりと「芸術に政治的価値なんてものはない、芸術評価の軸は芸術的価値だけだ」²¹⁾と述べている。この中野重治の言明は、当時の特高警察の弾圧を逃れるためのものなのかどう確かめる必要がある。なぜならばイデオロギーと文学、ましてやイデオロギーと芸術を分離出来るであろうかという問いが残るからだ。社会や国家を資本家と労働者と見なし、階級闘争、支配と服従と言った視点から考察する世界観は、戦争が目的化した軍国主義にあっては弾圧の対象になるのは目に見えている。

吉田精一は、吉田絃二郎の教え子の井伏鱒二に対する評価の中で、「大正時代の末から昭和時代のはじめは、左翼文学が非常にはやった時代です。若い作家はだれもかれも左傾しました。左翼にならない青年は良心がないといわれたほどで、その方面の書物を二、三冊読むと、きのうまでの自由主義者や右翼的な青年が、あすは左翼になっている、いうありさまでした。」²²⁾と記している。

4、右翼という軍国主義文学

このイデオロギーは、自然主義や日本浪漫派の文学の流れの中から発展してきたものである。この流れは、小林多喜二が特高警察のリンチを受けて「日本共産党万歳」と口走ったのとは対局に位置し、「天皇陛下万歳」という言葉に集約されるであろう²³⁾。ただしこの「天皇陛下万歳」の軍国主義のイデオロギーは、ロシア革命の以前から、すなわち日本の明治維新以降の国家戦略にかかわることであり、われわれの日本人の先輩がロシアを含む欧米列強の帝国主義に対して戦いを挑み、日清戦争、日露戦争と勝ち、欧米が押しつけてきた不平等条約を撤回させる役割を果たしたのであり、もちろんその結果が日中戦争や大東亜戦争に突き進み、最終的には敗北につながったのであったが価値ある歴史だと評価しなければならない。この軍国主義の方向が完全に間違っていたという主張は、われわれの歴史を公平に見ていないことになる。19世紀から20世紀は戦争の時代と定義するならば、どのような国家も戦争に打ち勝つだけの戦略を持たなければならないからだ。単に戦争反対だけでは、マルクス主義がソ連から借りてきた猫であったにしか過ぎなく、無意味な批判であると言える。このことは現在の日米関係、日中関係、日韓関係、日欧関係、日露関係においても日本も国家体制と日本の歴史と伝統の視点を確立し、日本の国家主義的視点を忘れてはならない。なぜならば日本が米国、中国、ロシア、韓国になるわけでないからである。

ただし明確な文面等の宣言ではなくても、左翼的な文学やマルクス主義的な文学に対抗する意味で、「力の弱い新興芸術派と称される一団があるだけでした。これは一名エロ、グロ、ナンセンス派と称されたようにエロ(好色)、グロ(怪奇)、ナンセンス(無意味)をかんばんにして、都会生活の表面を描いて行こうという、退廃的で、享樂的な生き

方]²⁴⁾があり、思想的には左翼に対して鬱積した対抗意識が起こっていた。

5. 中立の中道主義文学

野山嘉正は「・・・大正6年の大ロシア革命が国際的に波及した結果の一つという面が強かったが、・・・プロレタリア文化全体の建設という観点から、文化面のプログラムがマルクス主義に基づいて作られた・・・」²⁵⁾と述べる一方で、「・・・文学者が徴用されて日本軍支配の地に赴き、PR用の文章を書かされる機会が多く、それは生き延びるのにやむを得ぬ対応だったとも言える。井伏鱒二のように戦争と直接関係のないことだけで綴った『花の街』の如き紀行文をどのように考えるか意見の分かれるところである・・・」²⁶⁾と述べている。この論述は、井伏鱒二の作品を中道として扱う他にないということの意味している。文学や芸術がイデオロギーや偏狭な世界観に囚われることなく、自立的人間が、マルクス主義や軍国主義のように御都合主義的に順応していくような他律的人間ではなく、新しい文明と美しい世界の創造に加担していくことこそ文学や芸術の美であると説明できる。

6. 吉田絃二郎の感想主義文学

吉田絃二郎は、左翼や右翼などの権力の主導権争いに距離を置き、マルクス主義文学や軍国主義文学の主張や価値観にも組することなく、自らの価値観や自らが創造した感想主義の文学を構築した人物である。彼は、資本家対労働者の戦いというよりは、不正直者対正直者、怠惰者対勤勉家の戦いでなければならぬと語る。このように述べ、自らを左翼文学や右翼文学の立場に置くことなく、人々の持っている感情、感性、虚無感、寂寥感などや、さらに人々のごく自然な存在である動物や植物等を感じる感覚を大切に感想と言う考え方を確立した作家である。あるいは外部環境や社会的矛盾を鋭く主張し、それらと

の激しい戦いを宣言するのではなく、自らの内面的世界との心の形成に力点を置いた作家である。このような考え方が、当時の戦争、植民地などの世界戦争に突入して行く過程に対して、多くの人々の賛同を得たものと考えられる。そうでなければ、当時の著作集18巻などのような大規模な出版として世の中に受け入れられなかったであろう。

昭和6年に吉田絃二郎著作集が出版された時に、評論家・吉江喬松氏は、その著作集の月報に次のように書いている。すなわち「吉田絃二郎ほど性格と作品との一致している人も少ない。吉田氏と対話している時に感ずる細やかな心遣いと、深い思いやりと、普き同感とは、氏の作品の総てに残るところなく行きめぐっている。常に若々しい叙情詩人吉田絃二郎の我が文壇における存在はまさにユニークなものである。そしていかなる人とても必ず一度は通過するであろう吉田氏の興うる純情表現の芸術圏は、またいかなる年齢の人にとっても楽しい階層の源泉になるものである。人間の若さはその若さの中に生活している人にとって尊くまたそれを回想する人にとっても楽しいものである。この純情の花園は我が吉田氏が常に惜しむことなく何人にでも公開して止まざるものである。吉田氏の同感とは、人間に対してのみ動くのではなく、動植物にでも、天地山川にたいしてでも流露し、展開する。氏は偏見を持たない。さればとて何事かに固執するのではない。氏の人格全体が自在に天地に爛漫して、その中へ凡ゆる万象を情感を通じて抱擁するのである。そして万物をめぐり、万物のいるべき場所にたたなはり、それを己が旨に抱いて表出し再現し、吟味する。氏は孤独のようであって、しかも万象に行きめぐる。氏の孤独は寂しさではなくて清らけく、純一なるが故に偏在していて、しかも何処にでも呼吸をかわせている。私は嘗て氏の存在は清水の泉の如きものであるという印象を述べた記憶がある。清水の泉

は何処にでも見られる。野の末にでも、森の陰にでも、道端の柳の下にでも、旅人の通う何処にでも見られる。しかもそれは常に変らざれども、またそれは不変の永久の清新さを常にたたえて、人々を永遠にひるがえらせる力をもっている。そして日夜の区別なく湧き出てやまぬ純情の流れである。我が吉田絃二郎氏の存在はこの尊き一掬に清水を、その所を通るあらゆるものに供してくれる。汲めどつきせぬ清水の存在は何人にとってもありがたきものである。若人にも老人にも、行人にも居住者にも。そしてそれをめぐって人生のあらゆる姿がその一片の面影をそのところへ止めて行くのである。この人生の記録がすなわち吉田氏の作品となって現れてくるのである。私は吉田氏の代表作の一つ「島の秋」を今でも記憶に鮮やかに刻まれている。「島の西郷」の戯曲をその風光と共に忘れられずにいる。九州平野の菜の花の黄色の鮮やかさを、それが氏の作品であろうが、談話であろうが、人の胸裡に刻み込むには同じ効果を持っている。吉田氏その人の存在と同じく、その作品が我々に懐かしさを刻まずには置かぬ。吉田氏の作品には悲愁は漂ってはいられぬ。けれど懐かしさがくまなく流れている。如何なる人とても吉田氏とその作品とから親しさと懐かしさを感じない人はいないだろう。もし吉田氏に背いて行く人があれば、それは背いて行く人の不徳である。あるいは不明である。吉田氏その日とは一片の雲の去来するごとく、その陰影の地上に印するのを眺めやると、その人の立ち去る姿をながめやつていよう。けれど、過ぎし日の楽しみを思い出の中に描いて悔いに違いない。万象の流転と共に情感を注いで、涙を流す詩人の純情さ、今や吉田氏は静かなる境地に身を置いて、過去より現在にいたる世相を眺めつつ、事故の情感の展開せる世界を全集という十数巻の書籍にまとめ確実に把握していることであろう。氏の情感の世界は正に一大転換期に来ているのである。発散自在を凝集

統一へ、同感流露を抱制集注へ、そして豊富多感な氏の性情は一層まろやかに雄渾に十分なる時間とともに完熟境を構成しつつあることであろう。この詩人作家の将来にはさらには大きな期待がかけられているのである。』²⁷⁾とである。

さらに有名な吉屋信子もまた吉田作品について、「おもひで」²⁸⁾として次のように論じている。すなわち「あの頃は皆なせんちめんたるだった、見るもの聞くものみんなもの悲しくすぐ泣きたくなった。19が年齢下で21が年齢上の女友達の仲間だった。浅草で清水金太郎が歌劇をやって華やかにし頃である。カルメンだの椿姫だのボッカチオなんて私達はあすこでつつしんで拝見したのである。あとで仏蘭西へ行った折巴里のグランド・オペラでカルメンを見た夜、ふいつとあの頃の浅草のカルメンを思い出してしまった。あゝ年月経たり、海山遠く来りつるかな、久しぶりであの頃のように涙ぐんだ、そのあの頃私達のグループでの年少十九のSちゃんは歌劇女優の志願の年をとうとう起こした。そして清水金太郎を訪ねて行った、そうして忠告されて帰って来た、房州の女学校を卒業してお茶の水高師入学試験の準備に来ていたのに、それがそうなったのには私達の責任もあった、浅草へなぞ連れて行ったからである。ほんと言え、そんな所へおほびらに行つてはいけない筈の私達だった。何故なら私共は神田のYMCAの寄宿舎に居てミッションスタイルの女学生でなければならなかったから- “Sちゃんみたいに現実的なひと羨ましいわね” そうオペラ女優志願のSちゃんの勇敢さを羨んだkさんは女子英学塾に居た美しい人だった。北海道札幌の人、五月は鈴蘭、秋には林檎がおくから送つて来て、私達に分けて貰うのが楽しみだった。雪国の生まれらしく色白の目の澄んだ人だった。寂し気にその眼を伏せるのがくせだった、その人の本棚にはその頃まだ数少なかった吉田絃二郎の感想

集が、出版された限りならんで居た。“貴女も読んでよね、一人で読んで考へるのさびしいの”と彼女はその本を私に貸した、もとより私は文学少女の無我夢中喰いつく様にどんな本でも読んだ。あれは何という題だったかしら、小型の本でクロスの表紙の青地に白百合が描いてある表装だった。“人間はひとり生まれ一人死ぬるさびしい事実だ-”こんな風な言葉のところにアンダーラインが引いてあった。私は胸が塞つた、その本読み終わって返す時、Kさんが“よかった？”と聞く故、“読んでよかったわ”と言ったらKさんは嬉しそうに“ありがとう”とお礼まで言った。“吉田絃二郎の写真出て居たから買って来たの”とある日彼が差し出したのは（文学時代）以前の文章倶楽部か何かだった。その頃絵に大きく書齋に於ける吉田絃二郎氏といふ様な説明で、質素な机の脇に丸坊主の頭で紺飛白みたいな着物で座って居るのがその人だった。“こんな粗末な机で偉いわね！”Kさんは涙ぐむほど感動した、偉大な作家のお机の粗末さに。神田のどこかに文学講演会があったある土曜の午後、Kさんはその日の聖書研究会の科目をすっばかして聴きに出かけた街角のビラに書かれた数人の講師の中に吉田絃二郎の名が有ったからである。つまらない聖書の話に倦んで私達が寄宿舍の部屋へ引き上げた時、Kさんも興奮して講演会からかえって来た。“どうだったの？”私達は自分も行けばよかったと羨みつつ問うと、“私やと遠くからでもほんとの人見られて嬉しくて嬉しくて、あのね、演壇に登ると息をはあはあさせて、”時間に間に合う様駆けつけたので息が苦しくて—“つて仰しやるの、そしてね、”僕なんか演壇に上がって話すなぞすれば人を幻滅させるだけです“なんて真面目に仰しやるの、私いきなり立ち上がって”いいえ決してそんな事は有りません“と大声で言ってあげたかったわ—”Kさんのこの言葉に皆どっと笑った。テミツドなKさんがさうまで思う心のかたじけなさ—私は何か吉

田絃二郎が妬ましかった。と言うのは、私はこの美しい友を大好きで崇拜していたからである。その友が吉田絃二郎への崇拜さ—太陽を妬むように及ばぬと知りつつの妬み心はさびしいかつた。小鳥来る日—あのわたしの大好きだった感想集の出た頃は、もうKさんは肺が悪くて学校をよして北海道へ帰っていた。そして震災後結婚し、間もなく母となる身で未亡人になったと伝わったばかり、昔の友への消息はぱったり止まった。幸福に華やかに生きるには、あまりに陰の寂しかったあの人だった。十九のSさんが大騰にすぐ歌劇俳優の家を訪問したのに、二十一のKさんは遠目に崇拜の作家を見て喜んで、じかに吉田絃二郎を訪問できぬ人だった。Sさんはその後女学校の先生になって今は有名な声楽家T氏の奥さんで元気らしい。Kさんは？離れて遠き人よ！吉田絃二郎と言えば貴女を思い出すほど忘れはしないのに・・・」という長い感想を述べている。

おわりに

明治19年佐賀県神埼（現、神崎市）に生まれる。4歳の時、両親に連れられて、佐世保に移住。17歳で佐賀工業高校を卒業、その後20歳で早稲田大学英文学科に入学し、25歳で卒業した。29歳（大正4年）の時、早稲田大学講師となり、英文学と英語を担当した。教え子の井伏鱒二によれば、ワーツワース、ブレイク、モーリス、バーンズなどの講義を通じて英国的美と日本的美について比較した講義に力点を置き、非常に魅力的な講義であったと述べている。吉田絃二郎は、早稲田大学英文学の坪内逍遙、島村抱月に次ぐ英文学者と言われていた。彼の生きた時代は、ホワイトヘッドの時代と大差ないので両者の美の比較は重要だ。日本で初めての両者の比較を本論で実行してみた。ホワイトヘッドの美は、いつの時代にも通じる普遍的美学を構成している。この意味での普遍性は文明の普

遍性に通じるであろう。吉田絃二郎の美は、一人一人の人間の命の共感から来るあたたかい心の感想であり、恍惚感の表現としての涙である。涙を強調する吉田絃二郎の感想主義の美学を理性主義の立場から人間の弱さと否定されることもあるが、しかしホワイトヘッドの把握理論の一連の感受＝フィーリングの視点から見れば、単純な物理的感受や知的感受を獲得している生命にとってはより普遍的美しさを表現している美学であると結論できる。この意味で普遍的美しさの美は、文明の普遍性に通じるものである。ホワイトヘッドと吉田絃二郎は、普遍的美の世界の建設に参加したのであり、時間を超越した文明のあり方を示唆したものである。この比較を通じて判明したことは、吉田絃二郎の感想主義は、ホワイトヘッドが強調する感受 (feeling) に結びつく結論できる。この意味で、吉田絃二郎の感想主義の重要性は、理性や悟性の強調から感性重視の方向転換を試みた事にある。

註と引用文献

- 1) 原岡秀人『吉田絃二郎の文学・人と作品』近代文藝社、1993年、4-63頁。
- 2) 井伏鱒二「吉田絃二郎の人間性」『井伏鱒二全集』第二巻、筑摩書房、1997年、10-17頁。
- 3) 井伏鱒二「吉田絃二郎氏の人間性」10-17頁、『井伏鱒二全集』第二巻、筑摩書房、1997年。
- 4) 井伏鱒二「吉田絃二郎氏の人間性」10頁、『井伏鱒二全集』第二巻、筑摩書房、1997年。
- 5) 井伏鱒二「吉田絃二郎氏の人間性」10頁、『井伏鱒二全集』第二巻、筑摩書房、1997年。
- 6) 井伏鱒二「吉田絃二郎氏の人間性」11頁、『井伏鱒二全集』第二巻、筑摩書房、1997年。
- 7) 参照、雑誌『静坐』は岡田式静坐法の普及のものである。
- 8) A. N. ホワイトヘッド『観念の冒険』山本試作、菱木政晴訳、松籟社、1982年、13頁。
- 9) A. N. ホワイトヘッド『観念の冒険』山本試作、菱木政晴訳、松籟社、1982年、12頁。
- 10) 参照、拙著『システム哲学序説』ではホワイトヘッドの現実的実質は、エネルギーと情報を処理するシステムとして再定義されている。
- 11) A. N. ホワイトヘッド『観念の冒険』山本試作、菱木政晴訳、松籟社、1982年、347頁。
- 12) A. N. ホワイトヘッド『観念の冒険』山本試作、菱木政晴訳、松籟社、1982年、348頁。
- 13) A. N. ホワイトヘッド『観念の冒険』山本試作、菱木政晴訳、松籟社、1982年、348頁。
- 14) A. N. ホワイトヘッド『観念の冒険』山本試作、菱木政晴訳、松籟社、1982年、351頁。
- 15) A. N. ホワイトヘッド『観念の冒険』山本試作、菱木政晴訳、松籟社、1982年、351頁。
- 16) この点についてホワイトヘッドは『観念の冒険』の第18章「真理と美」で詳しく論じている。A. H. ジョンソンは、最高の美は調和的組み合わせがパターン化したコントラストに成ることによってより豊かになり、過剰な調和は美を損ねると指摘している。参照 A. H. Johnson, *Whitehead's Philosophy of Civilization*, NY: Dover, 1962, p. 7.
- 17) 吉田絃二郎『小鳥の来る日』新潮社、1957年、45頁。
- 18) 吉田絃二郎「近代英文学に現れたる美の研究」外国文学会編『外国文学研究』第1輯、新潮社、大正12年、97-112頁。
- 19) 吉田絃二郎『小鳥の来る日』新潮社、1957年、83-84頁。
- 20) 吉田絃二郎『小鳥の来る日』新潮社、1957年、64頁。
- 21) 中野重治「芸術に政治的価値なんてものはない」『新潮』1929年10月号。
- 22) 吉田精一「作者と作品について」(解説)『ジョン万次郎漂流記』(井伏鱒二、ジュニア版日本文学名作選<16>), 偕成社、昭和40年、301-302頁。
- 23) 関谷一郎「イデオロギーと文学」『岩波講座・日本文学史』第13巻・20世紀の文学2, 岩波書店、1996年、216頁。
- 24) 吉田精一「作者と作品について」(解説)『ジョン万次郎漂流記』(井伏鱒二、ジュニア版日本文学名作選<16>), 偕成社、昭和40年、302-303頁。
- 25) 野山嘉正「近代文学史論」『岩波講座・日本文学史』第12巻・20世紀の文学I, 岩波書店、1996年、37頁。
- 26) 野山嘉正「近代文学史論」『岩波講座・日本文学史』第12巻・20世紀の文学I, 岩波書店、1996年、37-38頁。
- 27) 吉江喬松「吉田絃二郎氏の人と作品」『吉田絃二郎全集月報』第12号、新潮社、昭和7年3月。

伊藤重行

- 28) 吉屋信子「おもひで」『吉田絃二郎全集月報』第
4号, 新潮社, 昭和6年6月。(itow20111123)